ファーストペンギン通信

第 21 号
発行日
2024年
11月 9日
（土）
発行人
八王子実践
中学校
教頭
石川敦史

緊張しているとは思えない堂々とした発表でした。

応援団の皆さん、トップバッターの緊張をほぐしてくれました。

令和6年11月2日（土）　八王子市学園都市センターイベントホールに多摩地区の私立中学校10校の1年生が集まりました。

穎明館中学校、共立女子第二中学校、啓明学園中学校、工学院大学附属中学校、中央大学附属中学校、東京純心女子中学校、八王子学園八王子中学校、八王子実践中学校、明星中学校、明治大学付属八王子中学校です。

本校からは、善福陽華さんが出場しました。

プレゼンテーション・タイトル

「萩原彦七～桑の都八王子から生糸産業を発展させた～」

研究を始めるきっかけは

小学3年次、蚕を育て、まゆから糸取りをしたことです。その糸から織物ができ、加えて八王子市が織物の町と言われていることを知りました。

なぜ養蚕業が始まったか

八王子は丘陵地にあり、水利が悪く、やせている土地も多く、コメより畑作、特に桑の栽培に適していたのです。そこで多くの農家では桑を育て、蚕を飼い、生糸をとり、織物を作り家計の助けにしていたのです。

明治に入り、質の良い日本の生糸は欧米の国々にたくさん売れるようになりました。ところが、手工業の生糸作りでは質、量ともに満足のいく製品になりませんでした。

良質の生糸を求めて

そこで導入されたのが、「器械製糸」です。均一の質で大量に生産することができるようになりました。そのための工場を作ったのが八王子在住の商人「萩原彦七」です。

彦七の活躍

現在は日本機械工業がある場所を彦七は選びました。水路が動力供給に必要だったからです。彦七の製糸工場は急成長し、2年間で6,000円（現在の貨幣価値なら6千万円）の黒字になりました。外国との取引も自分で行い、横浜港へも甲武鉄道（現在のJR中央線）を使って運んでいました。

生産量全国一位

明治28年には製糸生産量全国1位になったのです。あの官営（国家経営）の富岡製糸工場を上回りました。萩原橋を自費で建設して、八王子の人々にもたいそう喜ばれたそうです。

突然の廃業

ところが、その橋が完成した翌年、萩原製糸工場は廃業、片倉製糸工場に売却されたのです。しかし、詳しい理由はわかっていません。

まとめ

「織物の町八王子」と言いながら、養蚕農家は現在1軒しか残っていません。後継者不足が原因だそうです。私たち若者が製糸産業の歴史や八王子織物の素晴らしさを伝えていきたいと思います。

参加者インタビュー

審査結果が出るまで、舞台上の参加者一人ひとりに、司会者からインタビューが行われました。

①出場した感想は？

善福さん：緊張して噛んだところもあったけれど、出場してよかったです。

②どのくらい準備に時間をかけましたか、また、どのようにして発表者に選ばれたのですか。

善福さん：この発表は夏休みの宿題で、全員が多目的ホールで実際にプレゼンを行い、先生が選びました。

③自分の学校の良さを教えてください。

善福さん：学校の中にコンビニがあって、（場内、笑） 生徒はみんな個性豊かです。話してて、とっても面白いです。

審査員の講評

萩原彦七と八王子の生糸産業織物産業をテーマに選んだことが素晴らしかった。この産業の発展の歴史をわかりやすく説明してくれました。それだけではなく、衰退している織物産業の将来についての提言も非常に良かったと思います。

審査結果

善福さんは優秀賞に輝きました。コンクール実行委員会会長より表彰状が授与されました。

11月25日(月)

コンクール動画配信開始！
当日の模様を是非ご覧下さい。

https://haishin.work/hachioji-shigaku

八王子市長　初宿和夫（しやけかずお）氏からの言葉

参加者全員へのねぎらいとお褒めをいただきました。加えて「胆識（たんしき）」というお言葉を頂戴しました。『胆識とは、現実の困難に直面しても、それを乗り越えられるように、自己のもつ見識・知識を使うことです。このプレゼンで身に着けた見識、学校や日常生活で学ぶ知識を使って何かを実行していく力なのです。若い皆様にこの胆識、実行力をもって成長を続けていただきたいと存じます。』

修学旅行団より速報

F.P.通信で
特集します。
乞うご期待！

1日目は
奈良からです。

11月4日（火）に新横浜を出発、奈良、大阪、京都への旅をして、7日（木）には、八王子に無事帰ってきました。

奈良にて昼食

法隆寺

薬師寺東塔

東大寺大仏殿

鹿と記念撮影

春日大社夜間特別拝観